

京都大学地理学談話会

会 報

第18号



2007

[目 次]

寄稿

遠いところまで歩いて.....	瀧端真理子（昭和56年卒）	1
教員になって初めて活きる院生の頃.....	今里 悟之（平成10修）	2

講演会の報告..... 4

チベット問題の生態学	月原 敏博（昭和62卒）	4
「格差社会」におけるソーシャルキャピタル論の可能性	埴淵 知也（平成16修）	7

研究室便り

＜外国人研究者～滞在された方と滞在予定の方～＞.....	9
＜地理学教室への寄贈図書～2006年度～＞.....	9
＜研究室の動静＞.....	12
＜3回生と新院生の自己紹介＞	
＜昨年度の実習旅行＞	
＜学部卒業生・院生の進路＞	
＜院生の研究状況の報告＞	
＜学位の取得＞	
＜2007年度講義題目＞	

事務局から

＜地理学談話会2006年度会計報告＞.....	15
＜訃報＞.....	16
＜お知らせ＞.....	16
＜オープンキャンパス：2006年度の報告と2007年度のお知らせ＞.....	17
＜2007年度地理学談話会OB交流会・講演会・懇親会のお知らせ＞.....	18
＜地理学教室百周年記念事業のお知らせ＞.....	18

※表紙写真について：地理学談話会新入生歓迎会（昭和43年）での織田先生（中央）
～教室所蔵の「地理学談話会」アルバムより～

寄稿

遠いところまで歩いて

追手門学院大学心理学部

瀧端 真理子(昭和56年卒)

地理学の教室にいた頃の私は、まだ幼くて、今思い出しても恥ずかしいことばかりである。先生方、先輩の皆さまには随分ご迷惑をおかけし、穴があったら入りたいというのが正直な気持ちだ。その先生方の多くが鬼籍に入ってしまったことが、残念でならない。そんな気持ちの中で、このエッセイをお引き受けしたのは、今、悩み迷っている若い方がおられるなら、私のような者の経験でも、少しはお役に立つかもしれないと思つたことである。以下は、笑ってお読みいただきたい。

学生の頃は、悩みが尽きなかった。脚が太い、から始まって、数学ができない、語学ができない、地図が読めない・・・ありとあらゆる面で劣等感の塊だった。なので、授業も出ずに、旅行とバイトばかりしていた。もっともっと落ち込んで、下宿に引きこもっていたこともあったが。友人は学外の人ばかりだった。

今にして思うと、この頃に培って、今、役に立っていることが二つある。一つはフィールドワークの手法。特に教えてい

ただいたという記憶はないが、何も知らないまま、卒論の調査でフィールドに出かけていき、地元の人に怒られながら、見ず知らずの人を訪ねていくコツを体得していった。二つ目は、旅行のコツである。時刻表とガイドブックを読んで、目的地に到達すること。ごく当たり前のことのようにだが、意外とこれができない人が多いことを最近知った。現在の職場に就職して、40台半ばにして、はじめてこわごとと海外へ出かけていったが、国外であろうと、電車やバスを使って目的地に到達する方法は、要は日本で一人で旅行するノウハウと同じだと知った。若い頃からの道楽が、今、とても役に立っている。

若い頃は、劣等感にさいなまれ、そこで止まってしまっていたと思う。その後、30台半ばで教育学部に編入学し、初めて、能力がなくても努力で補える部分があることを知った。家事や子育てに追われる日々を経て、学ぶ機会を奪われることの不自由を知ったあとの勉強に対する意欲は、若い学生時代とは全く違うもので、自主ゼミに入ったり、NFの企画を立てたり、初めて京大生らしい学生生活をエンジョイしたと思う。こんな具合に万事が人より一回り遅れているようだ。

紆余曲折を経て、幸運にも現在の職場に専任で採用された。相変わらず、理論研究のような頭の冴えがいる仕事には向かないが、書きたい、知りたいという思

いだけは強くあるので、研究テーマに困ることはない。奇妙なことだが、教育学部時代の有能で若い先輩たちの中には、「やりたいテーマがない」と密かに悩む人がいたのも事実だし、当時の助手さんには、「瀧端さんのように、やりたいことがある人は強いよ」と言われ、キョトンとしたこともある。

スタートが人よりも随分遅れているので、競争心のようなものも薄れ、日々楽しく過ごしている。今の職場は私のペースに合っているようで、辞めたいなどとは一度も思わないまま、もう7年が経過した。今は新学期で、光が急に明るい。授業もなく、ぽっかりと穴が開いている。先日、エレベーターの中で、副学長だかの偉い先生と一緒にいたので、「先生、なんか、私うつになりそうです」と言ったら、「何をあなたが」と笑われてしまった。学内で最もうつになりそうにならないタイプと思われているらしい。・・・この30年ほどの間に一体何があったのだろうか。

20歳くらいの若い頃には誰でも真剣に悩むものである。死にそうに悩んでも、やがては加齢とともに、忙しくて悩む暇などなくなっていき、ついには悩む時間が勿体ないという感覚に至る。なので、もし、これをお読みの方で、何か物事に深く悩んでいる方がおられるとしたら、明るい将来を信じていただきたい。たいていのことはどうにかなるものだし、苦

手なことでも克服できるものもある。旅に出て生きた人や地域に触れ、新しい世界を切り拓いていていただきたい。地理学を学ぶ醍醐味は、たぶんそこにあるのだと私は思う。



この春休みに訪れた韓国・安東市の河回村（ハフエマウル）で見かけたキリスト教会。夕方になると拡声器で、村中にお祈りの声が響き渡る。河回村は村全体が重要民俗資料に指定されている。

人口 121 世帯 229 名、豊山柳氏が 600 余年暮らしてきた同姓村。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
教員になって初めて活きる院生の頃

大阪教育大学教養学科

今里 悟之(平成10修)

博士課程中退後、阪大で助手を 2 年半勤め、大阪教育大に移って 4 年半になり

ます。院生に毛の生えた程度の仕事しかしていないのに、給料など頂いて良いのでしょうか。学生と会話していて、相手が盛んに「先生、先生」と言うので誰のことかと思っていたら自分のことだった、という状況にも少しは慣れました。教職免許も持たず、十分な準備期間もなかった毎週 7 ～ 8 コマの授業は、毎年毎年まさに一輪車操業の連続でした。

その中で卒論演習は、自分の専門を一番生かせる授業でしたが、所属が「地理学教室」ではないためもあって、学生のテーマとなると、学校の怪談、山の神信仰、巨樹の安らぎなどはまだ良い方で、子育て支援策、若者の就業意識とニート、授業料免除制度など、どこが地理やねん！といったものが花盛りです。とはいえ、院生時代の演習で、誰のどんな発表に対しても、的外れでも思いつきでも良いから必ず 1 回は発言する癖がついていたので、どんなテーマの発表でも、指導とってもらえるような内容は、あまり苦もなくコメントできています。

また、学生の卒論草稿には、隔々まで一字一句朱筆を入れて、何度も書き直させていますが、これも院生や助手の時代に、仲間の院生の原稿やレジュメを読んでコメントする習慣ができていたので、さほど抵抗感なく行えています。一癖ならず、四癖も五癖もある京大の院生どもを、一応納得させるコメントができれば、普通の大学の学部生など全く恐ろしくあ

りません。ただし、論文初心者のおそろしく下手くそな文章は、読み終えた後、極上の疲労困憊感を与えてくれます。まさに、子を持って知る親の恩です。

一般教養科目の大人数授業では、自分の専門でも何でも無い話を、パワーポイントを使って誤魔化しながら、わかりやすく伝えるのに本当に苦労しました。特に教育大の学生は教員志望者が多いため、授業に対する評価も厳しめです。それでも、講義で初心者に噛み砕いて話すことは、自分の論文をわかりやすく書くための、とても良い訓練になっています。院生時代の「プレゼンのへたなイマザト」の汚名は、少しは返上できているのではないのでしょうか。まさか授業までもが、自分の研究に直接生きてくるのだとは、教員になりたての頃は夢にも思いませんでした。

このような一輪車操業の中、自分の研究のためにフィールド調査に出ることは、この数年間ほとんどできませんでした。それでも、院生と助手の頃に集めたものの論文にできていなかったデータを使って、何本かの論文には何とかまとめることができました。大学院演習で、先生方を悪い意味で感嘆させていた、ただ分量だけの多い、まとまりのない発表も、数年以上経ってからようやく生き始めています。

授業の合間を縫って論文を書く際にも、院生時代に読んでも当時は論文に全く活

かされなかった英語論文、民俗学・社会学・哲学といった隣接分野の本が、思わぬところで生きてきています。院生仲間で開いていた英書輪読会、毎週のように京都や関西近辺で開かれていた小さな学会や研究会、大阪市大や関学大の院生との交流などは、研究の「基礎体力」をつける源になっていたように思います。年に1本必ず学会誌に論文を書くことを叩き込まれたことも、「三つ子の魂百、千、万まで」的に恐ろしいくらいに生きています。レフェリーからの激辛コメントにも、大学院演習で閻魔様や仁王様たちにしごかれたお蔭で、2～3日思い切り落ち込んだ後は、1週間もすれば再び闘志の炎が燃え始めます。

院生や任期制助手の頃には、お金の面でも気持ちの面でも余裕がなく、今でも心にずっしりと重くのしかかる思い出もないわけではありませんが、それらはむしろ反面教師として自分の中に位置づけています。研究がうまく行かない学生や、上手な身の処し方がわからず「非行」に走ってしまう人々の気持ちも、少しだけわかるようになりました。苦しい時には特に、自分の境遇を周りの人々と比べがちになります。けれども、2～3年程度の短期的な表面上の差など、十年単位の長期的な目で見れば、いつの間にか帳消しになっているものだと、最近ようやく、煩悩にまみれたままで悟りの境地に達しました。これも皆様方のお蔭です。

とはいえ、研究はやはり、基本的には「楽しい」ものだと思います。自分のテーマに関する本や論文を読む時、集めたデータをまとめて論文にする時には、少しは世間ずれして腐り始めた心といえども高鳴ります。とにもかくにも「好きな仕事」に出会えて、同僚と学生にも恵まれ、税金ドロボーと後ろ指をつつかれる危険と常に背中合わせではあっても、それでご飯が頂けているのですから、少なくとも仕事に関しては、幸せな道を歩ませていただいていると感謝しております。そうは言っても、やっぱり講義は今でも、あまり得意ではありませんが。

→↑←↓→↑←↓→↑←↓→↑←↓→↑
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

～講演会の報告～

2006年11月18日、文学部新館第2講義室において、談話会秋季講演会として、福井大学教育地域科学部助教授月原敏博先生と京都大学大学院文学研究科博士課程埴淵知也氏に講演していただきました。

チベット問題の生態学

月原 敏博

(福井大学教育地域科学部助教授)

(昭和62年卒)

チベット問題の端々には中国とチベット相互の無理解が数多く顕れ、両者の溝のとても深いことがうかがわれる。本日は、この問題の深層に横たわる、文化生態や政治生態から説明されるべき事柄について述べたい。

チベットは、モンゴルなどと同じく、19世紀に英露のグレートパワーが中国にまで及んだフロンティアに位置した。チベットとモンゴルは辛亥革命後にもともに独立を宣言して互いのそれを認め合った頃まではほぼ同様の政治的軌跡を辿っていたが、英国が退いた後の独立インドはその軍事的影響力を弱めたことが誘因となり、チベットでは半世紀前に中国の勢威が大きく伸張してその独立は失われた。以後、地政学的構図は基本的に変わらず、今日ではチベット問題は欧米からの一定の同情や支持を受ける軍事的には空手のチベットと強者の中国との関係としてあり、政治面での進捗はほとんど見られぬ一方で、人権、教育、言語などの諸問題が国際的にも注目され、以前とは様相を少し変えて民族と文化の存続自体が危ぶまれる事態となっている。

今日のチベット問題は、歴代中国政府の対外政策や対異民族・辺境政策の累積上にあるといってよいので、これにはむしろ中国問題と形容すべき面も少なくない。とくに、清朝政府や民国政府の対異民族・辺境政策には、現在の中共政府との共通点もないわけではないが異なる点

が少なくなかったこと、旧ソ連とは異なっていて現中共政府の政策では形式上でも民族の自決権や連邦制は初期の肯定から否定へと翻されたこと、また、1950年代におけるそうした政策の最終的な確立過程は、いまだ明らかになっていないものの中共中枢部での権力闘争を伴う重要な論争の一つであったことなどには注意を払わねばならない。

チベット文化の核心を取り出すとすれば、宗教つまり仏教・仏法に当たるチュー（インドでいうダルマ）を筆頭に、言語、及び風土性（土地と生活様式）の3つこそ最重要だと考えることができる。チベット文化地域の多様性と統一、言語や文化的アイデンティティー、政体などの広域的統一と地方的分裂など、チベットに見られた政治・文化の歴史地理は、その生活空間の基本単位である谷（くに：ユル、ルン）の等質性と地理的分散とを基礎に、チュー・スィー・スンデと呼ばれた教政一体制に象徴される伝統的な政治文化体制のあり方から解釈・説明できる。仏教（チュー）と政治（スィー）は、それぞれ聖事と俗事を代表するものであったが、近代でも依然として前者が重んじられ続けた結果、後者に属す民族主義や国家主義はチベット人全体が一致して選ぶところとはならなかった。結果として強国に対抗しうるような民族・国家的統合はろくに実現せず、少なくとも短期的にはチベットは近代への適応に失

敗した。

現在、いわゆるチベット自治区のみならず中国領内のチベット人居住地域をまとめて大チベットと括る見方が双方にあるが、仏教優先の伝統的な思考に即していえば、真に大チベットと呼びうるものは、内・外モンゴルや旧満州の一部のほか、インド・ネパールの北部やブータンなどヒマラヤ沿いの諸地域をも包含したチベット仏教文化圏全体以外にはない。それは、じつに現中国の国土面積の半分近くにも及び、現中国に占めるチベット仏教圏の大きさ（少なくとも面積における）に改めて思いを致さざるを得ない。

ところが、事ここに至った現在でも、チベット人には仏教を最優先する思考が根強い。世界人権宣言の思想を受け入れた暫定憲法を發布して民主的政体をとるインドのダライ・ラマ亡命政府においても、かつての教政一体制は放棄したとはいえ、人権や平等、民主といった普遍的価値はほかならぬ釈尊の教義から導かれ、依然として仏教を大前提として非宗教主義には立っていない。仏教が、現在でもチベット人の歴史と文化のアイデンティティの中核に位置するといえるゆえんである。

しかし、この「国を失ってでも仏教を護る」精神は、軍事と国益、物質主義など、仏教的価値からすれば克服されるべきもののばかりで彩られる現在の世界情勢に対するチベット人からの警鐘（とくに

ダライ・ラマからのそれ）を、より説得的なものにしてもいる。今日の世界では、何より仏法を尊ぶこの思考が、かえってチベット人とその文化への共感や注目を集める作用をも果たしているのである。チベットは、全方面で成長著しい今日の大中国の、様々な意味での陰画であるが、現在の多民族国家中国のあり方が、果たして清朝の乾隆帝の頃のそれに勝るかどうかということまで考えさせる力をもっている。

中国や東南アジアにも深い造詣をもったチベット学者 R.A.スタンは、東アジアの中でチベットにもっとも似た歴史・文化を有するのは日本だと述べた。冠位制、貴族、寺社、荘園、土地制度、神仏習合（チベットの場合はいわば仏神習合）など、古代から中世の日本史にはチベットと類似の事象を数多く見出すことができ、その比較研究の推進は興味深く思われる。しかし、チベットは、日本と同様にインドや中国というアジアの文明中心ではないながら日本以上にそれらに間近に接し、またその接触の中でそれらから様々な文化要素を取捨選択して自らに取り入れてきた「もう一つの例」であることに注意を喚起しておきたい。チベットの歴史と文化の理解を深めてチベット人の見方を知ることによって、中国、インド、モンゴル、さらには日本についても、それら個々の性格や特徴を新たに発見しなおすこともできるように思われるのである。

「格差社会」における ソーシャルキャピタル論の可能性

埴淵 知哉

(京都大学大学院文学研究科博士課程)
(平成16修)

いわゆる「格差社会」論においては、経済的な格差だけでなく、教育や医療、健康、さらには希望格差といった心理的な側面に至るまで、格差のありようとその結果が議論されている。その中ではとりわけ、「勝ち組」と「負け組」といった象徴的なカテゴリが注目されてきたが、格差という構造が生み出す社会的成果や、その過程に介在する別の要素にも目を向ける必要がある。

本発表では、所得格差と健康、そしてその間にある要素とみなされているソーシャルキャピタル (Social Capital) の関係について、社会疫学や公衆衛生学で注目を集めている二つの仮説—相対所得仮説とソーシャルキャピタル仮説—を紹介し、日本における実証研究の現状と課題を報告する。

相対所得仮説とは、貧しい人ほど不健康であるという絶対所得ではなく、所得格差が拡大すると (社会全体の) 不健康が増すという、相対的な所得の影響を指摘するものである。この仮説が提示されて以降、世界的に膨大な研究蓄積が進め

られ、統計分析や因果関係への批判、さらには累進課税や社会福祉政策にも関わるという性格上、多くの論争を生み出してきた。先行研究の系統的レビューからは、所得格差の大きな社会 (国) を対象とした場合、また分析単位となる地域単位が国や州といった大きなものである場合に、この仮説が支持されるという指摘がなされている (Subramanian and Kawachi 2004)。

次に、ソーシャルキャピタル仮説とは、ソーシャルキャピタルが豊かな地域ほど健康が増すというもので、格差—健康関係を説明する作用経路の一つとして注目されている。ソーシャルキャピタルとは、協調行動を促す信頼、規範、ネットワークなどを指す概念であり (パットナム 2001)、人や組織の関係性を包括的に捉える視点である。この概念の一つの特徴は、高度に抽象的な概念でありながら、その操作化・測定が進められており、それが政策科学や実践面での注目を集めてきた点にある。「一般的に、人は信頼できると思いますか？」といった質問を地域ごとに集計して分析すると、それが様々な社会的指標と関連を持つことが指摘されており、健康に関しても、多くの事例研究でソーシャルキャピタルの増加が健康と好ましい関連にあることが示されてきている (Islam et al. 2006)。

さて、「一億総中流」から「勝ち組・負け組」へと経済的・心理的格差の拡大が

指摘されるなか、日本ではどのような傾向がみられるのだろうか？これら二つの仮説に対して、日本福祉大学「健康の不平等研究会」が、愛知県知多半島を対象として、高齢者に対する大規模アンケート調査（2003 年）をもとにした検証を進めている。主観的健康感（Self Rated Health）という健康指標を被説明変数、個人の年齢・性別・婚姻状態・等価所得を個人レベルの統制変数、そして所得格差を示すジニ係数、またはソーシャルキャピタルを示す変数を地域レベル（校区）の説明変数としたマルチレベル分析の結果、相対所得仮説・ソーシャルキャピタル仮説ともに支持される結果となった（市田ほか 2005a, b）。特に注目されるのは、従来の研究とは異なり、日本の比較的小さな地域単位による分析から、このような結果が得られたことである。さらにその後の分析で、ソーシャルキャピタルに対する二つの見解—それは個人の属性か、それとも地域（コミュニティ）の属性か—を検証するために、ソーシャルキャピタルを捉える質問への回答を被説明変数としたマルチレベル分析を行なった結果、個人属性の影響を除去しても地域差が存在することが確認されている。

ソーシャルキャピタル論を先導してきたパットナムがその研究過程において「空間的比較に注目するようになった」（パットナム 2001: 序文）というように、ソーシャルキャピタルは優れて地理学的な研

究テーマである。この「資本」の形成・蓄積・消滅などに対して、空間や場所がどのように関わるのか、すなわち「ソーシャルキャピタルは地域の属性である」という命題に関する地理学理論の構築が求められよう。

市田行信・近藤克則・平井寛・吉川郷主・小林慎太郎 2005a. 所得分配・ソーシャルキャピタル・個人の社会経済的地位・主観的健康感の関係について—知多半島の高齢者を対象にしたマルチレベル分析による研究。第 17 回国際疫学会発表日本語要旨。

市田行信・吉川郷主・平井寛・近藤克則・小林慎太郎 2005b. マルチレベル分析による高齢者の健康とソーシャルキャピタルに関する研究—知多半島 28 校区に居住する高齢者 9,248 人のデータから。農村計画論文集 7: 277-282.

Subramanian, S. V. and Kawachi, I. 2004. Income inequality and health: What have we learned so far?. *Epidemiologic Reviews* 26: 78-91.

Islam, M.K., Merlo, J., Kawachi, I., Lindstrom, M. and Gerdtham, U.G. 2006. Social capital and health: Does egalitarianism matter? A literature review. *Int J Equity Health* 5.

パットナム, R. D. 著, 河田潤一訳 2001. 『哲学する民主主義—伝統と改革の市民的構造』NTT 出版。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

＜外国人研究者

～滞在された方と滞在予定の方～

2007 年 2 月 26 日から 2008 年 2 月まで、ヤン・ボギョン（楊普景）先生（誠信女子大学校教授，韓国）が文学研究科招聘外国人研究者として滞在され，韓国を含めたアジアの古地図・絵図の研究に従事される予定です。また、2007 年 1 月 17 日には、李孝聡先生（北京大学歴史系教授，京都大学文学部 COE 客員教授）に、「地図からみた北京における都市プランの歴史」（通訳：伍躍 先生（大阪経済法科大学教授）と題して、ご講演いただきました。

＜地理学教室への寄贈図書

～2006年度～

個々の寄贈者のお名前は掲載しておりませんが，昨年度，地理学教室にご寄贈いただいた図書の一覧です（雑誌・定期刊行物等は除く）。これらの図書は，文学研究科図書館または地理学共同研究室に配置し，学生ならびに教室スタッフの研究・教育に活用させていただいております。厚く御礼申し上げます。

過去にいただいた図書も含めて，これ

らの寄贈図書は，皆様にもご利用いただけるようにしておりますので，どうぞご活用ください。

東北大学大学院理学研究科地理学教室
（2005）『会津地方の地域調査 2005 実習報告書』

岡山大学（2006）『第 8 回環境理工学部
国際シンポジウム』

関西大学地理学研究室（2005）『実習報告書（30）2005 年度』

氷見山幸夫（2002）『日本と中国の土地利用・土地被覆変化に関する地域間比較研究 5』（科学研究費基盤研究（s）報告書）

荒木一視（2006）『輸入野菜急増下における青果物流動の地理的パターンおよびその変動』（科学研究費基盤研究（c）（2）報告書）

法政大学気候学談話会（2005）『2005 JAPANESE PROGRESS IN CLIMATOLOGY』
産業技術総合研究所地質調査総合センター
『地質図の社会的価値－米国地質調査所サーキュラー1111（日本語翻訳版）および米国における地質図の経済的評価の動向－』

杉浦和子編（2006）『地域資源管理の手法に基づく中山間地域の総合的な環境保全戦略の提言－平成16年7月福井豪雨による災害復旧・復興対策を組み入れて－』

- Pushkar K. Pradhan (2004): Rural Urban Relations With Particular Reference to Nepal. "Ministry of Local Development/ United Nations Development Programme".
- 岡山大学文学部地理学教室(2005)『2005(平成17)年度地理学野外実習・実験調査演習報告書』
- 蘭信三(2006)『日本帝国をめぐる人口移動(移民)の諸相研究序説』(科研基盤研究(B)(1)報告書)
- 岩田慶治(2006)『森林・草原・砂漠 森羅万象とともに』(人文書館)
- 東京学芸大学教育学部地理学研究室『臨地研究報告 第1号 -八ヶ岳山麓の地域調査-』
- 京都大学大学院文学研究科(2006)『京都大学文学部の百年』
- 文化庁(2006)『文化的景観(北山杉の林業景観)の保存・活用事業報告書』
- 神戸COE『安全と共生の都市空間セミナー実施報告 no.4』(2005年度後期)
- (財)福武学術文化振興財団『創立20周年記念誌 1985-2005 (CD-ROM付)』
- 群馬県教育委員会水辺の回廊研究委員会『水辺の回廊エコミュージアム 環渡瀬遊水池及び利根川東遷地域におけるサテライトモニタリング調査 平成17年度ふるさと文化再興事業・伝統文化総合支援研究事業研究報告書』
- Ministry of Foreign Affairs, Japan: A historical overview of the name "Sea of Japan"
- 名古屋大学地理学教室『せとうちの生活史いんのしまー 29人のあしおとー』
- 名古屋大学大学院環境学研究科社会環境学専攻『社会環境学の挑戦 人間・社会環境学構築ワークショップ 報告書 3 (シリーズ VI・VII)』
- 山本健児(2006)『経済開発と環境保全をめぐるアクター間の相互作用と通じた地域振興に関する研究』(平成16年度～平成17年度科学研究費補助金基盤研究(c)研究成果報告書)
- 石原潤・趙榮・秋山元秀・小島泰雄編『西安市と陝西農村の変貌』(奈良大学文学部地理学科)
- 島根大学附属図書館編『絵図の世界ー出雲国・隠岐国・桑原文庫の絵図ー 付録: 元和・寛永年間松江城下町絵図<堀尾紀>トレース図』
- 福井勝義編著『社会化される生態資源 エチオピア 絶え間なき再生』京都大学学術出版会
- 池谷和信編『地球環境問題の人類学 自然資源へのヒューマンインパクト』世界思想社
- Katsuyoshi Fukui (ed.): Comparative Studies of Northeast African Societies: Anthropology, Linguistics and History A review of Japanese research project 1986-1997. (Kyoto University)

Katsuyoshi Fukui: Comparative Studies on
Indigenous Knowledge System in South
Ethiopian Societies A review of Japanese
research projects 1997-2003. Kyoto

University

秋篠宮文仁編著『鶏と人 民俗生物学の
視点から』(小学館)

スティーブン・フェルト『鳥になった少年 (カリ社
会における音・神話・象徴)』(平凡社)

大場茂明『近代ドイツの市街地形成-公的介
入の生成と展開-』(MINERVA 人文・
社会科学叢書 76) (ミネルヴァ書房)

布野修司編著『近代世界システムと殖民
都市』(京都大学学術出版会)

奈良地理学会編『ひとあじちがう歴史地
理探訪 大和を歩く』(奈良新聞社)

フィリップ・D・カーティン (田村愛理・中堂幸政
・山影進訳)『異文化間交易の世界史』
(NTT 出版)

香月節子・香月洋一郎『むらの鍛冶屋』(平
凡社)

小穴芳実『安曇野開発史の研究』(信毎書
籍出版センター)

小穴喜一『土と水から歴史を探る-古代・
中世の用水路を軸として-』(信毎書籍
出版センター)

宮田登・高田衛監修『鯰絵 震災と日本
文化』(里文出版)

松山利夫『ユーカリの森に生きる アボ
リジニの生活と神話から』(NHK ブックス)

INAX ギャラリー名古屋企画委員会企画
『すき・くわ・かま[土に生きるかたち]

/INAX ギャラリー』(INAX)

ジュールベルヌ (榊原晃三訳)『ラ・ペル
ーズの大航海』(NTT 出版)

岐阜市歴史博物館蔵(2002)『方言修行金
草鞋木曾路巻』(岐阜新聞社)

桑楊庵光編(2002)『岐蘓路安見繪図』(岐
阜新聞社)

谷川渥『幻想の地誌学 空想旅行文学涉
猟』(トレヴィル)

ジョージ・J・テムロ他著 (高木真琴訳)『地理
の世界へようこそ 数億年の地球物語』
(心交社)

Terry G. Jordan-Bychkov, Mona Domosh,

Terry G. Jordan: The Human Mosaic: A
Thematic Introduction to Cultural

Geography. Longman Pub. Group; 8th ed.

寝屋川市『寝屋川市史 第6巻近現代史
料編』

水内俊雄編『シリーズ人文地理学 4
空間の政治地理』(朝倉書店)

五十嵐勇作編(2006)『会津南山御蔵入産
子養育-松枝茂氏収蔵史料-』

首都大学東京都市環境学部大学院理学研
究科・東京都立大学理学部理学研究科
『地理学教室年報 2005 年度』

琵琶湖博物館(2006)『琵琶湖博物館資料
目録 13 号 民俗資料 1 琵琶湖水系
漁撈習俗資料 (1)』

琵琶湖博物館(2006)『琵琶湖博物館資料
目録 14 号 民俗資料 1 琵琶湖水系
漁撈習俗資料 (2)』

石原潤・溝口常俊『南アジアの定期市』(日

本地理学会海外地域研究叢書 5) (古今書院)

宝塚歌劇団郷土芸能研究会取材(2006)『—日本民俗芸能—資料目録(改訂版)』(財団法人阪急学園池田文庫)

「山鹿誠次先生を偲ぶ」刊行会『山鹿誠次先生を偲ぶ—都市・地理・教育とともに半世紀—』

九州大学地理学研究室『地域調査報告 7 2004 対馬市』

九州大学地理学研究室『地域調査報告 8 2005 しまなみ海道』

中川正・森正人・神田孝治『文化地理学ガイダンス』(ナカニシヤ出版)

立正大学大学院地球環境科学研究科オープンリサーチセンター編『正大学文部科学省学術研究高度化推進事業オープンリサーチセンター(ORC)整備事業事業報告書 平成 17 年度事業報告書』

竹内啓一先生追悼集編集委員会編(2006)『竹内啓一先生追悼集 地理学と国際文化交流とのあいだで』

千田嘉博・矢田俊文編『能登七尾城 加賀金沢城[中世の城・まち・むら]』(新人物往来社)

『ユビキタスネットワーク社会における地理情報の新しい表現と利用に関する研究』

『女性と高齢者を対象にした地理情報伝達と空間行動支援への GIS の応用に関する研究』

『GIS を用いた地理情報の伝達とナビ

ゲーションの支援に関する研究』

中部大学人文学部歴史地理学科『2005 年度地理学野外実習報告』

中部大学人文学部歴史地理学科『2006 年度地理学野外実習報告』

＜研究室の動静＞

教室の事務は、引き続き三上純子さんをお願い致しております。

本年度は、大学院博士後期課程 2 名、修士課程 6 名、学部 4 回生 13 名、3 回生 6 名、研修員 1 名、研究生 1 名となっております。

＜3 回生の自己紹介＞

本年度は 6 名の 3 回生と 2 名の新院生(修士課程)、研修員 1 名、研究生 1 名を迎えました。3 回生の皆さんに簡単に自己紹介していただきます。

(3 回生)

安達 裕美子

3 回生の安達裕美子といます。部活動では体育会のアーチェリー部に所属しています。まだ地理学専修で何をやりたいのかははっきりとは決めていませんが、周りのみなさんについていけるよう、頑張って勉強していきたいと思います。

飯島 崇善

地図を眺めてるだけで飽きません。バイクを手に入れてから毎日が小旅行です。去年は鳥取に行ってラクダと戯れることに成功したので、今年の目標は宮崎にいて地鶏を食べることです。皆さんどうぞよろしくお願いします。

上田 直人

上田です。事務の方の美しさに魅せられて地理学を専攻しました。よろしくお願いします。

阪口 知洋

大阪府出身の阪口と申します。地理学教室では交通や都市について学びたいと思っています。また私は体育会自動車部に所属しており、一応、主将であります。部では車を整備し、その車を使いラリー等の自動車競技に出場します。こんな私ですが宜しくお願いします。

里村 知美

3回生の里村知美です。友人に私は常に冷静だとか、天然だとか、よくテンパるとか色んな事を言われますが、自分ではどれも自覚できていません。就活の自己分析がかなり不安です。顔に全く酔いが出ないため、よく酒豪だと勘違いされます。どうぞよろしくお願いします。

野瀬 美咲

こんにちは。3回生の野瀬美咲です。現在、女子ラクロス部に所属しています。そのおかげで地理学専修の誰よりも、いえそこらへんの机にも勝るほど肌が茶色いのではと危惧しています。地図を見るのが好きで、特に都市に興味があります。よろしくお願いします。

〈昨年度の実習旅行〉

2006年度は、10月23～26日まで、富山県氷見市において、2回生・3回生の計10名が調査を行い、報告書を作成しました。

〈学部卒業生・院生の進路〉

*学部卒業生

大塚 俊介	三鷹市役所
勝部 泰行	住友商事(株)
木野 俊輔	日本郵政公社
桑名 光紀	近畿日本鉄道(株)
煙山 哲史	京都大学大学院文学研究科 (修士課程)
本多 真太郎	鹿島建設(株)
南都 奈緒子	京都大学大学院文学研究科 (修士課程)

*大学院修士課程

木村 理恵	カップ・クリエイト(株)
星田 侑久	(株)パスコ
堀川 彰子	(株)ベルブライダル

＊大学院博士後期課程

福本 拓 京都大学文学部研究生

＜院生の研究状況の報告＞

今年度までの院生の研究状況をお知らせします。以下は、閲読を経た論文のリストです。

研修員 埴淵 知哉

- ・企業の空間組織からみた日本の都市システム, 人文地理 54-4, 389-404 頁 (2002)
- ・国際的非政府組織における空間組織の編成, 地理学評論, 78-2, 87-112 頁 (2005)
- ・日本における NGO 間ネットワークの編成, 人文地理, 57-5, 2005, 21-40 頁 (2005)
- ・「NGO と「地域」との関わりー日本の地方圏に所在する NGO による「地域からの国際協力」ー」, 地理学評論, 80-2, 49-69 頁 (2007)

研究生 福本 拓

- ・大阪府における在日外国人「ニューカマー」の生活空間, 地理科学 57-4, 255-276 頁 (2002)
- ・1920 年代から 1950 年代初頭の大阪市における在日朝鮮人集住地の変遷, 人文地理, 56-2, 42-57 頁 (2004)

D 3 沖 慶子

- ・牧口常三郎著『人生地理学』の同時代評, 地理科学 58-2, 65-91 頁 (2003)

D 2 柴田 陽一

- ・小牧実繁の著作目録と著述活動の傾向, 歴史地理学, 47-2, 42-63 頁 (2005)
- ・小牧実繁の「日本地政学」とその思想的確立ー一個人史的側面に注目してー, 人文地理, 58-1, 1-19 頁 (2006)

M 2 宮澤 博久

- ・大分県姫島の沿岸漁業における共同体基盤型管理ー沖建網漁業の漁場規制を事例としてー, 人文地理, 57-6, 64-79 頁 (2005)

＜学位の取得＞

平成 18 年度に学位を取得された方のお名前と論文題目は以下のとおりです。

＊論文博士

佐野 静代：「水辺環境と村落景観の歴史地理学的研究」

＊課程博士

埴淵 知哉：「非営利・非政府組織と都市システムに関する地理学研究」

＜2007年度講義題目＞

＊講義（系共通科目）＊

准教授 米家泰作 地理学

＊特殊講義＊

教授 金田章裕 「文化的景観」の諸問題

教授 石川義孝 人口地理学の諸問題

教授 田中和子 空間行動の分析に
関する諸問題

准教授 米家泰作 地理的知の近代

人環教授 山田 誠 地域形成の諸問題

人環教授 金坂清則 地理学における人
物研究の諸問題とその意義

人環准教授 小方 登 地理情報処理の
原理、およびその応用と
しての歴史景観復原

理学部准教授 堤 浩之 地形学

経研准教授 森 知也 集積の経済学
：理論・実証分析

地球環境学堂（助教）講師 水野 啓
GIS の基礎技法

講師 山野正彦 地理学史・地理学方
法論の諸問題

講師 布野修司 アジア都市論

講師 川端基夫 企業立地と空間編成
・空間再編

講師 小林 茂 人間一環境関係への
歴史的アプローチ

講師 安仁屋政武 南米・パタゴニア
氷原の地理学

講師 宮口 廸 農山村地域論—日本
の農山村の歩みと発展のための考察—

＊演習Ⅰ—地理学研究法—＊

金田章裕・石川義孝・田中和子・米家泰作

＊演習Ⅱ—4回生演習—＊

金田章裕・石川義孝・田中和子・米家泰作

＊講読＊

教授 金田章裕・田中和子

英語地理書講読

教授 田中和子 ドイツ地理書講読

人文研助手 田中祐理子 フランス地理
書講読

人文研助手 中西裕樹 中国地理書講読

＊地理学実習＊

田中和子・米家泰作・上杉和央（博物館）

＊大学院演習—地域の諸問題—＊

金田章裕・石川義孝・田中和子・米家泰作

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

事務局から

<地理学談話会2006年度会計報告>

（2006年4月1日～2007年3月31日）

【資金会計】

〈収入〉

年会費 196,440

利子 11

前年度繰越金 214,764

計 411,215

〈支出〉

運営への振替 283,060

次年度への繰越 128,155

計 411,215

【運営会計】

〈収入〉

資金会計からの振替	283,060
秋季懇親会会費	74,000
春季予餞会会費	112,400
計	469,460

〈支出〉

秋季懇親会 OB 交流会経費	80,477
春季論文発表会・予餞会経費	111,000
会報・名簿等印刷費	156,405
通信・文具等費	86,678
弔電等	34,900
計	469,460

＜訃報＞

前回の会報以降、次の方々がお亡くなりになりました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。(確認分、括弧内は卒業年、敬称略)

浅井 辰郎 (昭和 14 卒)
織田 武雄 (昭和 07 卒)
高橋 美久二 (昭和 42 卒)
田中 直 (昭和 21 卒)
谷渕 梅亀 (昭和 10 卒)
松田 信 (昭和 19 卒)
水野 元 (昭和 20 卒)
山崎 修 (昭和 11 卒)

＜お知らせ＞

以下の会員の住所が不明です。ご存じの方は、談話会事務局までご一報ください。(数字は卒業年、敬称略)

植村 元覚 (昭和 16 卒)
柴田 孝夫 (昭和 14 卒)
戸川 俊正 (昭和 16 卒)
林 宏 (昭和 16 卒)
村本 達郎 (昭和 10 卒)
池内 麟太郎 (昭和 48 卒)
安福 伸光 (平成 09 卒)
石角 強 (昭和 45 卒)
石原 大嗣 (平成 09 卒)
石村 裕輔 (平成 04 卒)
今井 平八 (昭和 19 卒)
岩部 敏夫 (平成 03 卒)
遠藤 元 (平成 08 卒)
遠藤 正雄 (昭和 53 卒)
大山 晃司 (平成 07 卒)
岡本 靖一 (昭和 42 卒)
岡本 美津子 (昭和 62 卒)
興津 俊之 (平成 03 卒)
小口 稔 (平成 03 卒)
楓 雅之 (昭和 20 卒)
勝村 眞知子 (昭和 48 卒)
川合 大地 (平成 10 卒)
川添 和明 (平成 07 卒)
貴志 謙介 (昭和 56 卒)
木地 節郎 (昭和 24 卒)
北口 卓美 (平成 02 卒)
合屋 有希 (平成 06 卒)

児玉 高太朗（平成 02 卒）
坂部 誠治（平成 03 卒）
清水 究吾（平成 10 卒）
新谷 泰久（平成 02 卒）
神力 弘幸（平成 05 卒）
鈴木 伸国（昭和 63 卒）
田島 渡（昭和 23 卒）
塚本 誠（平成 02 卒）
都子 ？（昭和 15 卒）
中山 耕至（平成 05 卒）
那須 久代（昭和 63 卒）
南部 一寿（平成 11 卒）
西尾 正隆（昭和 45 卒）
西沢 仁晴（昭和 49 卒）
西山 隆彦（平成 07 卒）
能勢 正寛（昭和 37 卒）
林 克子（平成元卒）
平井 素子（平成 08 卒）
福田 新一（昭和 46 卒）
松本 弘史（昭和 58 卒）
御手洗 央治（平成 05 卒）
山口 一郎（昭和 55 卒）
山下 良（平成元卒）
山田 憲子（昭和 45 卒）
山中 一高（平成 03 卒）
吉野 修司（平成 07 卒）
六嶋 美也子（平成 05 卒）
李 禧淑（平成 13 博）

＜オープンキャンパス：2006年度の 報告と2007年度のお知らせ＞

2006 年 8 月に恒例となりました京都大学のオープンキャンパスが開催されました。文学部の見学・説明会もこの一環として、10 日に行われました。文学部の全体説明のあと、各系に分かれて専修ごとの説明を行ったうえで、見学者を募りました。研究室訪問では、古地図を見て説明を聞いたり、GIS のデモンストレーションを見学したりしていただきました。教員、院生や学部学生たちへの質問コーナーでは、高校生たちから活発な声が聞かれました。同日、全学の企画と並行して、地理学教室主催のオープンキャンパスも開催しました。こちらにも高等学校の生徒さんたちが参加されました。地理学実習室や博物館地図作業室を見学したり、卒業研究や進路の様子について説明を行いました。

2007 年度の京都大学主催の全学オープンキャンパスについては、
<http://www.kyoto-u.ac.jp/>
をご覧ください。文学部の見学・説明会は、
8 月 9（木）の予定です。

地理学教室のオープンキャンパスも、
全学のオープンキャンパスの日程に合わせて 8 月 9 日（木）に開催予定です。学部だけでなく大学院の受験志望者や、中

学高校の教員の方々、また、一般の市民の方にも来て頂けるような企画を検討しております。教室主宰のオープンキャンパスについての詳細な日程や参加申込の案内は、地理学教室のホームページ、
<http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/geo/>
に、近日中に掲載しますので、そちらをご覧ください。

＜2007年度地理学談話

OB交流会・講演会・懇親会

のお知らせ＞

2006年度の秋季談話会の際、プレ企画として、「OB 交流会」を試行いたしました。これは、ここ数年、地理学専攻の学生向けに内輪で実施しておりました「就職説明会」を発展させたものです。就職活動の情報やテクニックの伝授を超えて、教室 OB の方に自身の体験や試行錯誤の歩みを率直に語っていただくことにより、学生たちへの励ましやアドバイスとなればと願って企画した試みです。2006年は、瀧端真理子さん（昭和56卒）に起こしいただき、とても有意義で印象的な交流の機会を持つことができ、学生・教員ともども大変うれしく思いました。

今年も、引き続き、OB 交流会を計画しております。講師の方に限らず、どなたでもご参加いただける、気楽な座談会

です。卒業生と在校生が直接にお話すること自体が得難い機会と考えております。簡単な茶菓も用意致しますので、どうぞふるってご参加くださいますよう、お願い申し上げます。

本年は、OB 交流会も含めて、下記のようなプログラムを予定しております。

記

日 時：12月1日（土）

午後2時—5時

場 所：文学部新館1階

第1・2講義室

◎OB 交流会：午後2時より

講師（交渉中）

◎講演会：午後3時半より

千田 稔

（国際日本文化研究センター 教授）

◎懇親会：同日午後5時より

（文学部新館 第1講義室）

＜地理学教室百周年会記念事業の

お知らせ＞

（1）記念出版事業について

12月1日（土）の談話会当日までには刊行できるよう、下記のような内容で出版作業を進めております。

書名：

『京都大学文学部地理学教室百年史』

（仮題）

主な内容：

- 第1章 京大地理学教室百年の歩み
- 第2章 歴代教授の地理学観
- 第3章 地理学研究の展開と
京大地理学教室
- 第4章 地理学教室創設期の人々
- 第5章 卒業生から見た地理学教室

出版社：ナカニシヤ出版

価格：未定

※なお第1章～4章を『地理学 京都の百年』（仮題）と題して一般にも販売する予定です。

（２）京都大学総合博物館での 企画展について

<春季企画展>

『地図出版の四百年

京都・日本・世界』

期 間：

2007年4月4日（水）～5月6日（日）

開館時間： 9時30分～16時30分
（入館は16時まで）

休館日：月・火曜日

場 所：京都市左京区吉田本町

入館料：一般400円

※案内のチラシを同封しております。
どうぞご覧下さい。

☆一年あたり千円を目処として、それぞれの会員の方々に、談話会の運営経費へのご協力をお願いしております。随時、ご支援をお願いいたします。納入の際は、同封しております「郵便振替用紙」をご利用下さい。

【編集を終えて】

今年の談話会報は、総合博物館での企画展に間に合うよう、例年より早めに発行しました。早々と原稿をお寄せくださった方々に厚く御礼申し上げます。

【談話会係から一言】

光栄にも今年も談話会をつとめることになりました。がんばります。（柴田）

地理学研究室に来てあっという間に2年が過ぎました。今年も新鮮な気持ちでお仕事を続けられるようにがんばります。
（三上）

京都大学文学部地理学談話会 会報 第 18 号

発行日 2007 年 4 月 18 日

発行者 地理学談話会

〒 606-8501

京都市左京区吉田本町

京都大学文学部 地理学教室内

Tel: 075-753-2793 (直通)

発行所 京都大学文学部地理学教室

URL <http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/geo/>